



0歳児クラス | とうきょうすくわくプログラム 実施レポート (全3回)

第2回

くぐる、登るなどの基本の動きを広げ、 自分の力で進む経験を増やす。

第2回では、前回の経験を踏まえ、登る・降りる・傾くといった多方向の動きが生まれるよう環境を発展させました。段差や傾斜の中で、子ども自身が体の使い方を試しながら関わり、同じルートを進む姿も多く見られました。

活動のために準備した素材や道具、環境の設定

・プレイマット ・牛乳パックの段差

探究活動の実践

2025年8月8日、第1回の経験を受け、子どもの動きが安定してきたことから、「登る」「降りる」「傾く」といった多方向への動きが生まれるよう環境を発展させた。

小さなマットの山や段差などを取り入れ、傾斜で踏ん張る力やバランス力が育まれるよう工夫し、子ども自身が「どうしたら登れる?」「どうやって降りようかな?」と体の使い方を試行錯誤できるようにした。また、子ども同士が同じルートを進んでみる、後についていく様子が増えたため、通路の幅やコースの組み合わせを変えるなど、興味と発達に合わせて環境を調節していった。



活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり

・友だちが登った先で景色を見渡している姿を見て、次に自分も立ち止まって周囲を眺めるなど、友だちの行動を手がかりに動きや興味が広がる姿も多く見られた。

・小さな段差の上に立つと、バランスを取るために腕を広げて踏ん張る児、そっと座って高さを味わう児など、一人ひとりの身体感覚に合わせて楽しむ姿があった。

・マットの山では、登るときに一步一步踏ん張り、上に到着すると「できた」と満足そうに保育者を見て拍手を求める姿があった。降りるときには座って慎重に滑り降りる、後ろ向きでお尻を少しずつ下げるなど、自分なりの安全な方法を考えながら動く姿が見られた。保育者が「ゆっくりで大丈夫だよ」と声を掛けることで安心し、挑戦がさらに増えていく。活動を通して「登る・降りる」「高い・低い」「傾く」といった要素を体験することができた。

振り返りによって得た先生の気づき

・小さなマットの山や段差を取り入れることで、登る・降りる・傾くといった多方向への動きを十分に経験することができた。子どもたちが、傾斜で踏ん張ったり、段差の上でバランスを取ったりしながら、自分なりの体の使い方を試行錯誤する姿が見られている。また、友だちを真似て立ち止まったり、後について同じルートを進んでみようとする姿が見られ、他児の動きが新たな挑戦へのきっかけとなっていることが感じられた。

・マットの山から降りる際には、後ろ向きでお尻から少しずつ降りるなど安全に動くための方法を自分で考えて選択する姿も多く見られた。保育者の「ゆっくりでも大丈夫だよ」という声かけによる安心感や、挑戦後に保育者と目を合わせて達成感や満足感などの気持ちを共有から、何度も繰り返し挑戦する姿も増えていった。

・第2回のからだ遊びを通して、高さや傾斜に対する興味がより強くなり、より複雑な動きや体の調整力を経験できる環境へと発展させていく必要性を感じた。一方で、歩き始めの子ども達にとっては動きがまだ不安定であり、環境の区切りや安全への配慮も重要であると感じる。第三回では、からだ遊びの場として明確に区別でき、安心して挑戦できるよう、からだ遊びコーナーとして使用するジョイントマットも取り入れていきたい。